

拝啓 今年もはや 11 月末となりました。お元気でお過ごしのことと思います。いつもエンカウンターお読みいただきありがとうございます。近所の公園では、紅葉と落ち葉がきれいな頃となりました。

カール・ヒルティ先生の『眠られぬ夜のために』の第 7 回目からは、同書の第 2 部からの抜書きをご紹介します。第 2 部がスイスで最初に発行されたのは 1919(今から 90 年前)年でした。ヒルティの亡くなったのは、1909 年でしたが、ヒルティは生前から『眠られぬ夜のために』の第 2 部の草稿を準備しており、不足していた部分を娘さんが補い、1919 年に発行されたのでした。

ヒルティは、聖書を深く読んでおり、引用を自由自在にしていることが分かります。本の中の本といわれる聖書を、これほど読んで、引用が自由にできるということはすばらしいことだと思います。

ヒルティ先生の本は、若い頃も読んだことがありましたが、それほど感銘は受けませんでした。ところが、最近 67 歳になって読んでみると、なるほどと思う文章が多く、またすばらしい先生にめぐり会えたという感想です。

ヒルティ先生を紹介して下さったのは、南原先生の本です。南原先生が亡くなられたのは昭和 49 年 5 月 19 日でしたが、その年昭和 49 年の学士会の新年祝賀会の挨拶に代えて会報に寄稿された文章には次のように書かれています。「私ども若いとき旧制一高時代に、名物教授と謳われた岩元禎先生のドイツ語の教科書で、カール・ヒルティの『幸福論』を読んだことがあります。それはいまだに座右の書のひとつとなっております。ご一同のうちにも同様の経験を持たれた方が多いと思います。ヒルティはスイスのすぐれた法律家かつ思想家でありました。その彼の書物をいち早く日本の青年の間に紹介したことだけでも、岩元先生の功績は大きくあります。…

この『幸福論』の終りに次のごとき叙述があります。『人は生命(いのち)の息のある限りはつらつとした精神を持って働き続け…最後に“ 仕事の中に倒れる ” こと。これこそ、きちんとした老年の正しい経過であり、また人生のこの上なく望ましい終局である。』…

しかし、多くの場合、ひとは老年のみならず、あるときは若い人々さえ、死の痛苦を避けられえないものであります。…そこでわれわれの知ることは、

病苦と死はわれわれの所業の善悪にかかわらず、東洋で言う人間の『業』であり、およそ人間として生まれたものの『運命』と申してよいでありましょう。

問題はそれから先、死後の魂あるいは精神の世界でしょう。…

昔、ギリシアのある神話によれば、われわれ人間は天上のどこかに住家があって、そこから地上に来て、それぞれの仕事や使命を終れば、再び天井の故郷

に帰るというのであります。キリスト教はさらにこれを更新・進化して永遠の天の国土の存在を説きました。東洋の仏教においてもこの現世に対して弥陀の浄土の存在を教えました。

実際、私どもの年令になると、家族を始め、親友・知己の多くはみなこの世を去りました。そうしてみると、この現実の世界か、あるいは見えない未来の世界か、そのいずれが真の实在の世界であるかを、疑うことがしばしばあります。」

この南原先生の文章は、この後、内村鑑三に触れ、次のように述べます。「彼(内村鑑三)は、聖書一卷によって無教会主義 日本的キリスト教をとき、多くの青年を教化し、晩年には『柏木の聖者』とも言われ、わが国思想界にも大きな足跡を残したのでありますが、その彼が最後の死の床に「宇宙の完成と日本の万歳」を唱えて目を閉じたということは、すこぶる象徴的な意味があります。」

11月3日の文化の日、学士会館で第6回南原繁シンポジウムが開かれました。今年は、基調講演予定者が直前になって体調をこわされ、加藤節先生に交代するというハプニングがあったのですが、190人ほどの人が出席され、充実したいい会になりました。今年は、特に若い会員ががんばってシンポジウムのパネリストとして、よい発表をしてくれました。本誌読者の佐藤昭夫さんは、いつものようにビデオ撮影をして下さいました。また、本誌読者の小西忠雄さんは、お嬢様と一緒に参加してくださり、感謝でありました。

オバマ大統領が11月に来日しましたが、対日日数が少なく、広島には寄られませんでした。もし広島に行かれれば、オバマ大統領がノーベル平和賞にふさわしい業績をこれからあげられるための大きなマイル・ストーンになると思ったのですが、色々難しい事情があるのでしょう。

いよいよ木枯らしが吹く冬がやってまいります。インフルエンザにかからないように注意して、御身体御自愛の程祈り申し上げます。

敬具

平成21年11月26日

山口周三

エンカウターの読者各位